

多良間島の両生爬虫類について
—— サキシママダラの採集例とヌマガエルの移入 ——

千木良芳範

(沖縄県立博物館)

On the Herpetological Fauna of the Tarama Island, the Miyako Islands
Additional Records of the Snake *Dinodon rufozonatus walli*

Yoshinori CHIGIRA

(Okinawa Prefectural Museum)

I、はじめに

宮古諸島は琉球列島の南西部に位置し、宮古島、伊良部島、下地島、池間島、来間島、大神島、多良間島、及び水納島からなる。これらの島々の両生爬虫類について、いくつかの報告があるが、ほとんどは宮古島に限られたものである。多良間島はもちろんのこと、それ以外の島々を含めたような調査は少ない。わずかに高良(1962)と当山(1976、1981)が知られているだけである。

筆者は1987年6月4日から9日まで、沖縄県立博物館主催の移動博物館の準備・開催のため多良間島を訪れた。わずかな滞在期間ではあったが、島の各所を踏査し、両生爬虫類について観察することができた。その中で、サキシママダラの標本が多良間村教育委員会に保存されていることを知り、その標本を見る機会を得た。また多良間島のヌマガエルについては、当山(1973)が宮古島からの移入である旨を記しているが、今回その詳細についても聞くことができた。これらのことを含めて、ここに報告する。

最後に、本調査において標本の借り出しや情報提供など、様々な面で便宜を図っていただいた友利哲一氏および多良間村教育委員会の皆様、ヌマガエルについての貴重な示唆をいただいた大山春翠氏に対し深謝の意を表す。

II、調査地の概要および調査方法

多良間島は水納島と共に多良間村を構成する島で、宮古島と石垣島のほぼ中間に位置している。面積がおよそ18.8km²で、周囲が約16.2kmになるほぼ楕円形をした島である。全体的に起伏の変化に乏しい平坦な島で、最も高いところは標高34.4mで八重山遠見台と呼ばれる丘である。島の周囲にはサンゴ礁が発達し、空から見ると二重丸を描いたように見える。島内各所にある御嶽林や部落を取り囲む擁護林は、フクギ、イヌマキ、テリハボクを主体とする森林植生で、面積の割には緑豊かな島である。

多良間島は畑作を中心にした純農村で、サトウキビを主幹作物にし、ラッカセイやニンニクなどが作られている。島全域が琉球石灰岩からなるためか、水田はみられない。集落は島の北側に集中し、島の南側にはサトウキビ畑が広がっている。そして、それらを取り囲んで、海岸林が発達している。

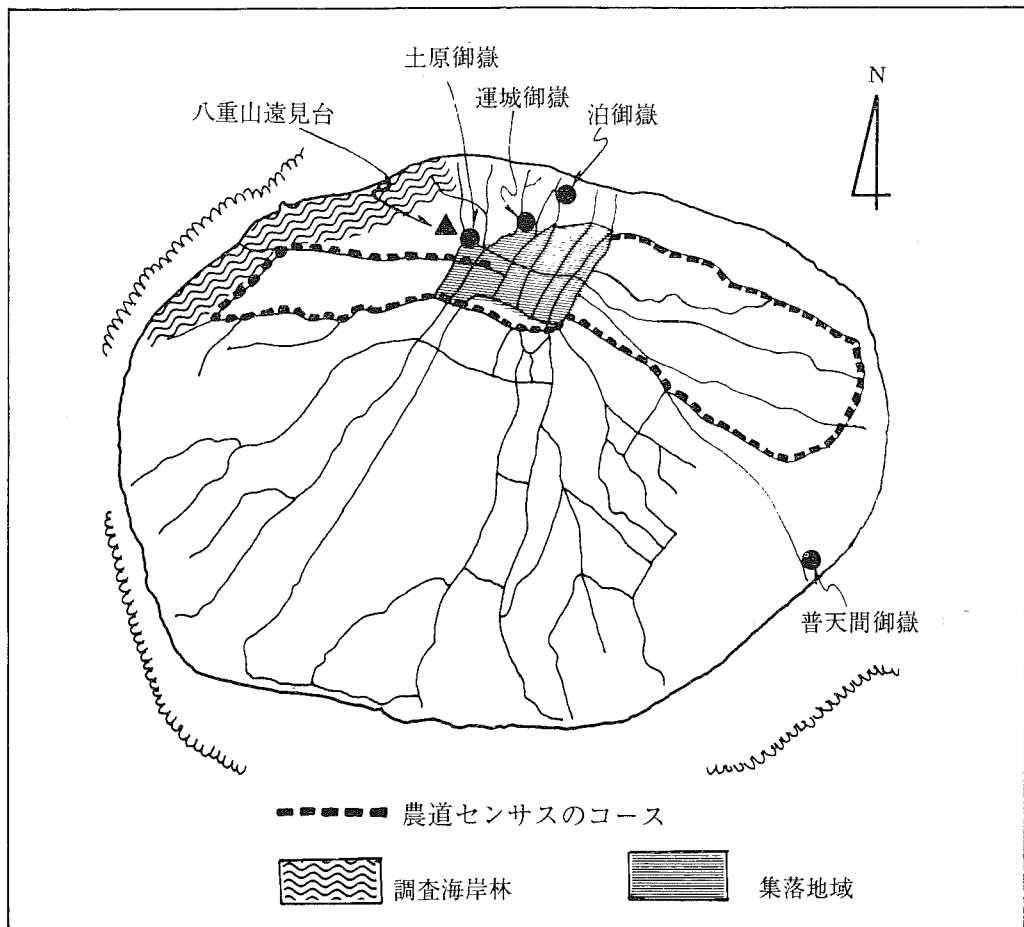


図1. 調査地点及び調査コース

調査は主として夜間に実施し、調査時間は1～2時間であった。任意に選んだ場所をランダムに歩き回り、目撃した両生爬虫類を記録し、必要に応じて採集した。調査地としては、植生の状態のよい御嶽の周辺や海岸林を選んだ。調査の日程、場所、および時間は以下の通りである(図1参照)。

6月4日、泊御嶽と運城御嶽の周辺 (Pm 10:00～12:00)。

6月5日、自転車を利用して、島の北側の耕作地域を調査 (Pm 3:50～6:00)。

6月6日、土原御嶽周辺 (Pm 10:00～11:00)。

6月7日、北西海岸の海岸林 (Am 9:00～Pm 3:00)。

6月8日、集落地域内 (Pm 11:00～12:00)。

6月9日、普天間御嶽周辺 (Am 9:00～11:00)。

Ⅲ、結果および所見

1. 確認された両生爬虫類について

調査期間中に確認した両生爬虫類について、以下に簡単に記す。このリストの内、サキシママダラ以外は調査期間中に筆者によって確認された。また()内に示した標本番号は、いずれも沖縄県立博物館に登録されたものである。

カエル目 SALIENTIA

ジムグリガエル科 Brevicipitidae

ヒメアマガエル *Microhyla ornata* (DUMERIL et BIBRON, 1841)

運城御嶽および泊御嶽林内(成体); VI 4、1987。中央部耕作地域の側溝内(幼生); VI 5、1987。仲筋部落内路上(成体); VI 5、1987。

成体の目撃数は少なかったが、部落内や耕作地域のあちこちの溝で多くの幼生を見ることができた。

アカガエル科 Ranidae

ヌマガエル *Rana limnocharis limnocharis* WIEGMANN, 1835

仲筋部落内(成体); VI 4、1987。中央部耕作地域の側溝内(幼生); VI 5、1987。

夜になると側溝の中でさかんに鳴いていた。部落内いたるところで見ることができる。また部落内や耕作地周辺の側溝および用水池では幼生も多数見られた。

トカゲ目 SQUAMATA

ヤモリ科 Gekkonidae

ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* DUMERIL et BIBRON, 1836
仲筋部落内; VI 4、1987。

宿泊している旅館の部屋で幼体を採集した(標本番号 OPM-H-0956)。また採集していないが、成体も目撃することができた。野外では見つけることはできなかった。

トカゲ科 Scincidae

サキシマスバトカゲ *Scincella boettgeri* (VAN DENBURGH, 1912)
土原御嶽; VI 6、1987。八重山遠見台前の海岸林; VI 7、1987。

御嶽林や海岸林の林床でよく見つかった。特に島の北西部、八重山遠見台付近の海岸林内で多く見つかった。ここでは3個体を採集した(標本番号 OPM-H-0957、OPM-H-0958、OPM-H-0959)。いずれも幼体および亜成体で、それぞれ全長26mm、43mm、88mmであった。

ヘビ科 Colubridae

サキシママダラ *Dinodon rufozonatus walli* STEJNEGER, 1907

野外調査では発見できなかった。島の人に聞いても最近ほとんど見ないとのこと。ここでは、教育委員会に保存されていた2個体の標本について記録する。

標本1:

採集年月日; 1987年4月30日。採集者; 下地春堅。

採集場所; 多良間島診療所の向いの家、水道メーターの箱の中にいた。

性別; 雌。全長; 96.5cm (頭胴長78.6cm、尾長17.9cm)。

標本の保管場所; 沖縄県立博物館(標本番号 OPM-H-0953)。

備考; 2匹でいたが、1匹は逃げられた。

標本2:

採集年月日; 1987年5月。採集者; 照屋健市。

採集場所; 多良間村役場の水タンクの側。

性別; 雌。全長; 61.3cm (頭胴長47.4cm、尾長13.9cm)。

標本の保管場所; 沖縄県立博物館(標本番号 OPM-H-0954)。

高良 (1962) はヘビ類に関して、宮古諸島の全ての島々を網羅したかなり詳細な報告をし、その中で多良間島から4属4種のヘビ類を報告している。また当山 (1976, 1981) は、宮古島、来間島、多良間島、水納島の四つの島におけるカエル類とトカゲ類について報告し、多良間島からは6属7種の両生爬虫類を記録している。これらをまとめると、多良間島の両生爬虫類相は、6科10属11種になる。ちなみに宮古諸島の両生爬虫類相が9科18属20種から成るので、多良間島にはその半分が生息していることになる。

今回の調査では、5科5属5種類の両生爬虫類が確認された。これらはすべて、高良 (1962) や当山 (1976, 1981) に含まれるものであり、多良間島の両生爬虫類相については、特に付け加えるべき知見は得られなかった。

2. サキシママダラの採集について

多良間島からのサキシママダラの報告は、高良 (1962) が初めてである。しかし、この中にサキシママダラを採集したという記録はない。また、その後のいくつかの出版物などに、サキシママダラの分布地として多良間島があがる。その出典の多くは高良 (1962) であり、採集した個体を基にしたサキシママダラの記録は、著者の知る範囲では見あたらない。今回見つけた標本は、多良間島におけるサキシママダラの存在を示す貴重な証拠となるだろう。

3. ヒメアマガエルとヌマガエルについて

当山 (1981) は、多良間島に分布するカエルのうちヌマガエルとヒメアマガエルの2種は移入された可能性があることを記している。今回の調査では、ヒメアマガエルについて明確にすることはできなかったが、ヌマガエルについては明らかに移入されたことがわかった。1977年発行の「在沖多良間郷友会20周年記念誌」の中に『西辺生れの蛙君』というみだしで、ヌマガエルが持ち込まれた経過について記述されている。筆者は多良間島に生まれ育った大山春翠氏である。以下参考のために、当該項目の全文を掲載する。

『昭和二七年八月、夏休みを利用し西辺小中学校の中学生が多良間旅行に来島した。引率の先生は現在佐良浜中学校長の仲間哲雄先生那覇在開南小学校教諭上原利彦先生たちである。当時西辺中学校長は村出身の垣花良香先生である。良香校長先生は小さい島ながらも多良間島のよさを紹介したために多良間旅行をすすめたようである。生徒たちもまだ見たことのない島、郡内で一番遠いへき地の島を見たかったのであろうか希望者が多かった。多良間出身の校長と上原先生から「多良間には珍らしくも蛙がいない」ことをきいた生徒たちは「よしおみやげはこれだ」と衆議一決、みんなでおたまじゃくしを持寄ることにした。船中でも死にはしないかとみんなで見守りながら多良間上陸に成功、早速、用水

池に放った。あれから二十四年目のこんにち、南のヌーや北の山あたりに蛙の小便に驚かされるときもある。おかげで農民に協力していただいている。(原文のまま)』

この記述から、持ち込まれたカエルがヌマガエルと断定することはできない。しかし筆者の大山氏によれば、現在部落内でよくみかけるカエル(ヌマガエルのこと)はもともとはいなかった。子供たちの修学旅行の後から見られるようになった。このことから生徒たちが持ち込んだカエルはヌマガエルとのことである。また西辺の生徒たちが、選択的にヌマガエルの幼生だけを採集したとは考えられない。もし当山(1981)にあるように、ヒメアマガエルが持ち込まれたものであるなら、あるいはこの時ヌマガエルと一緒に持ち込まれたのかもしれない。

IV、引用文献

- 高良鉄夫, 1962. 琉球列島における陸生蛇類の研究。 琉球大学農家政工学部学術報告, 9号:1-202。
- 当山昌直, 1976. 宮古群島の両生爬虫類(I)。 爬虫両棲類学雑誌, 6(3):64-74。
- 当山昌直・久貝勝盛・島尻沢一, 1980. 宮古群島の両生爬虫類に関する方言。 沖縄生物教育研究会誌, 13:17-32。
- 当山昌直, 1981. 宮古群島の両生爬虫類。 沖縄生物教育研究会誌, 14:30-39。
- 島袋曠・日越国昭・川上勲, 1981. 多良間村の主な御嶽の植生。 沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅳ:131-141。
- 在沖多良間郷友会, 1977. 在沖多良間郷友会20周年記念誌。